

# FUMIEテストによる同性愛への 潜在的態度測定に関する研究

中野大進・松高由佳

A study on measuring potential attitudes toward same-sex attractions using the FUMIE test

NAKANO Hiromichi and MATUTAKA Yuka

【要旨】本研究の目的は、同性愛への顕在的態度と潜在的態度の両側面を測定し、その差を検討することであった。潜在的態度測定方法として潜在連合テストIATの紙筆版であるFUMIEテストを用い、男性同性愛版FUMIEテストの作成、および収束の妥当性の検討を行った。質問紙調査で得られたデータを統計的に解析した結果、同性愛への顕在的態度と潜在的態度との間に有意な相関は見られず、同性愛者への態度に本音と建前があると考えられた。さらに、収束の妥当性を検討するため、同性愛版FUMIEテストの得点高群、低群5名ずつに同性愛の映像刺激を見せ、その前後で唾液中の精神的ストレス指標であるクロモグラニンA (CgA) を採取し分析を行った。CgAの値を独立変数、群と測定時期（映像視聴前・後）を従属変数とする2要因混合計画分散分析を行った結果、有意な交互作用は見られなかった。このことから、FUMIEテストの収束の妥当性に関してはさらなる検討が必要であると考えられた。

【キーワード】同性愛、FUMIEテスト、潜在的態度

## 問題と目的

現代でも近年、SNSやマスメディアからの報道、同性カップルパートナーシップ制度を導入する自治体の増加など、セクシュアル・マイノリティへの理解度は上昇していると考えられる一方、いまだセクシュアル・マイノリティに対して人々の理解がしっかりと浸透しているとは言い難い。例えば、2020年に東京都足立区議会の議員が少子化問題と関連させ「日本中がLGBTになってしまうと足立区や日本が減んでしまう」と、政治の上でも差別的な発言があった。また、男性・女性のみでの性別記入欄や同性愛者同士の結婚制度が無いこと、いじめ被害など、セクシュアル・マイノリティの人々に対する社会的差別・偏見などが存在しており、こうした差別・偏見によって当事者の中には精神的苦痛を感じる人々が存在する（日高、2016）。

2015年に吉仲・風間・石田・河口が行った、セクシュアル・マイノリティの人々に対する意識調査では、同性婚反対派の割合は48.9%であり、友人が同性愛者であった場合抵抗がある人の割合が男性で53.2%、

女性で50.4%であった。Pew Research Center (2013) が世界38,000人を対象に実施した調査結果では、日本の同性愛を容認する派は全体で54%であり、2007年度の調査結果49%と比較して5ポイント上昇したが、80~90%であるスペイン、ドイツ、カナダなどの国々と比較すると、日本では未だ否定的な見方が強いと言える。年齢別に見ると30歳未満では83%、30~49歳で71%、50歳以上で39%であり、若者において容認度が高いことが伺われる。

一方、日本の大学生を対象とした先行研究では、和田（2010）は大学生の中にも同性愛者に対する嫌悪感や偏見を抱くことがあり、男性の方が女性よりも嫌悪・拒否反応が高い傾向であると述べている。また、田中・伊藤・葛西（2019）は中学生と大学生を比較して、中学生の方が同性愛への態度が否定的であるが、大学生には偏見を持つことは好ましくないという社会通念を持っており、偏見を持っていてもそれを隠す場合があると考察した。

以上を踏まえると、同性愛への態度について一貫し

た結果は得られておらず、とりわけ大学生は同性愛についていわゆる「本音」とは別に、偏見を見せまいと社会的望ましさに影響を受けた「建前」的な回答を調査では示している場合もあると考えられる。つまり大学生は同性愛に対する偏見を持つてはいけないという社会通念を保有している割合が高いことが推測され、表向きはこの社会通念に沿って同性愛者を容認しているようで内心は否定している人々がいるのではないかと考えられる。このため、同性愛者への態度を検討していくうえで、顕在的（意識的）態度と潜在的態度の双方に着目する必要がある。筆者らは卒業研究にて、下田ら（2014）の「日本語版IPANAT」を使用し同性愛に対する潜在的態度測定を行った（中野・脇岡, 2021）。しかし、ターゲット（中野・脇岡ではターゲットは同性愛者）に対するポジティブ感情とネガティブ感情との間にやや強い正の相関がみられるなど、同性愛に対する潜在的態度の測定方法としては妥当性に疑問が生じる結果となり、IPANATではない新たな潜在的態度の測定方法を検討する必要があると結論付けられた。

潜在的態度の測定方法としてはGreenwald, McGhee, & Schwartz (1998) によって発表された「潜在連合テストIAT (Implicit Association Test)」が広く知られている。これはコンピュータを使用する方法であり、言葉の分類作業を通じて、概念と概念の結びつきの強さを測定することで、特定の対象に対する潜在的態度を測定するものである。潜在的認知指標の中でも比較的信頼性が高く、意図的に反応を変えることが難しいため、偏見や差別などの社会的に不適切とみなされる態度の測定や、自己呈示戦略に影響される自尊心の測定などに適したものとされる（潮村・村上・小林, 2003）。しかし、IATではPC上の専用プログラムが必要で、多くの場合個別実施になるためデータ収集の効率は良いとはいえない。そこで、より実施の簡便性を高めるために考案された紙筆版がMori, Uchida, & Imada (2008) 開発の紙筆版FUMIE (Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotions) テストである。FUMIEテストは、単一概念の測定が可能で実施が容易だという特長がある。

FUMIEテストによる同性愛者への態度測定に関する研究は見られず、また、妥当性に関する研究が少なく、さらに知見を蓄積する必要があると考えられる。先行研究では弁別的妥当性については検討しているが、収束的妥当性については検討されていない。

そこで、本研究では同性愛版FUMIEテストを作成し、潜在的態度と顕在的態度の両側面から大学生の態度を検討する。併せて、FUMIEテストの収束的妥当性に関する検討を生理的指標を用いて行う。

**FUMIEテストの収束的妥当性の検討に用いる生理的指標について**

ストレスは、自律神経活動、内分泌系および免疫系などに影響を与え、生体の恒常性に様々な変化を与える。ストレス負荷による代表的な生体反応は、視床下部-下垂体-副腎皮質系および交感神経-副腎髄質系といわれるストレス応答系を介した各種ホルモン（コルチゾール、カテコールアミンなど）の分泌や、その結果に伴う臨床所見（血圧や心拍数の上昇、血糖値の上昇など）として現れる。生化学的なストレス評価法として、血液中、尿中および唾液中のコルチゾールやカテコールアミンの測定が行われている。中根（1999）は、種々のストレス下における唾液中クロモグラニンA（以下、CgA）の変化を、既知のストレス指標物質であるカテコールアミンやコルチゾールと比較した結果、唾液中CgAが、精神的ストレス負荷時にはコルチゾールより先行して上昇し、負荷後は早期に減少すること、肉体的ストレスに対しては反応性が乏しいことをあげ、高感度な精神的ストレス指標として有用であることを示唆した。その他、唾液中CgAを精神的ストレス指標として用いた研究は多く存在しており（三木, 2008；木村・河野・中明・鈴木・神川・矢田, 2011；畑・小杉・小野寺, 2011；松井・乗松, 2012など）、心理的ストレスとパーソナリティの関連をCgAを用いて検証している。

本研究は同性愛版FUMIEテストを作成し、大学生の同性愛に対する態度を本音（潜在的態度）と建前（顕在的態度）の両側面から検討することを目的とする（研究1）。また、同性愛版FUMIEテストの収束的妥当性について精神的ストレス指標であるクロモグラニン（以下、CgA）を用いて検討する（研究2）。なお、男性の同性愛者に対する差別・偏見が特に問題になりやすいことから（品川, 2006）、本研究では同性愛の中でも男性同性愛者への態度に焦点を絞って検討する。

## 研究1 方法

**対象者・調査手続き** 大学生85名に授業時間を利用して無記名自記式質問紙を集団で実施し、その場で

回収した。

**質問紙の構成** ①目的と教示：目的については、大学生の男性同性愛者に対するイメージについて調べたことを説明した。男性同性愛者の定義として「男性を恋愛や性愛の対象とする男性のこと」と提示した。その他、調査協力の任意性、結果の取り扱いなどについて説明した。②ゲイに対する潜在的態度の測定：先述のMori et al. (2008) が開発した紙筆版FUMIEを参考に、ターゲット単語「ゲイ」として用いた。良いことを意味する単語には○印、悪いことを意味する単語には×印をつけるように教示した。全10試行のうち5試行では、「ゲイ」の単語に対して○印をつけるよう、残りの5試行では、「ゲイ」の単語に対して×印をつけるよう教示した。これらの試行を交互に行った。全10試行のうち、最初の2試行はMori et al. (2008) などの先行研究に倣い練習試行とし、それ以降でターゲット単語に○をつけた4試行の平均作業量から、ターゲット単語に×をつけた4試行の平均作業量を引いた値をIAS（潜在連想スコア：Implicit Association Score）として評定した。③ゲイに対する顕在的態度の測定：古長（2016）による「同性愛者受容感尺度」を使用。個人的受容感（「男性同性愛者（ゲイ）が友達にいても気にせず付き合う」などの8項目）、社会的受容感（「男性同性愛者（ゲイ）が存在するのは当然だ」などの9項目）の2因子17項目、「とても思う」～「全くそう思わない」の7件法で尋ねた。高得点ほど受容感が高いことを意味する。④フェイス項目：年齢、性別、学年、同性愛者の友人・知人の有無、性別違和のある友人・知人の有無。⑤研究2の実験の説明と協力依頼：実験協力についての説明と協力依頼の文章を記し、協力可能な場合は、日程等連絡調整のためのメールアドレス、ニックネームの記載を求めた。記載された情報については厳重に管理し、研究以外の目的で使用しないことを明記した。

## 結果

**回答者** 回答に欠陥があった8名（男性4名、女性4名）のデータを除外し、全体では残りの77名（男性21名、女性55名、その他2名、有効回答率90.1%）を分析対象とした。回答者の平均年齢は20.18歳（ $SD = 2.10$ ）であった。同性愛・両性愛の友人・知人有無については「有り」と回答したのは18名（23.4%）、「無し」と回答したのは28名（36.4%）、「わからない」と回答したのは31名（40.3%）であった。性別違和

のある友人・知人有無については、「有り」と回答したのは9名（11.7%）、無しと回答したのは39名（50.6%）、わからないと回答したのは、29名（37.7%）であった。研究1では、性別「その他」の回答者が2名と少なかったため、以下の分析では除外した。

**基本統計量** 同性愛受容感尺度では、古長（2016）より8項目「個人的受容感」、9項目「社会的受容感」の下位尺度に分類し平均値と標準偏差を算出した結果、個人的受容感の全体の平均が5.77（ $SD = 1.00$ ）、男性回答者の平均が5.91（ $SD = 0.93$ ）、女性回答者の平均が5.71（ $SD = 1.03$ ）であった。社会的受容感は全体の平均が6.25（ $SD = 0.82$ ）、男性回答者の平均が6.39（ $SD = 0.71$ ）、女性回答者の平均6.20（ $SD = 0.86$ ）であった。IASの平均値と標準偏差は全体の平均が0.01（ $SD = 2.31$ ）、男性回答者の平均が-0.36（ $SD = 2.25$ ）、女性回答者の平均が0.18（ $SD = 2.34$ ）となった。

FUMIEテストよりIASの平均値と標準偏差を算出したところ、平均は0.01（ $SD = 2.31$ ）となった。回答者の性別ごとに算出したところ、男性回答者のIASの平均は-0.36（ $SD = 2.25$ ）、女性回答者の平均は0.18（ $SD = 2.34$ ）となった。男女間の差をt検定で分析したところ、有意差は見られなかった。

## 同性愛受容感尺度とIASの相関の検討—男女別にみた検討—

同性愛受容感尺度の各下位尺度平均得点とIASとの相関関係を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した。また、男性回答者、女性回答者別で同性愛受容感尺度とIASの相関を算出した。全体で見ると、個人的受容感と社会的受容感は正の相関が有意であった。（ $r = .70, p < .05$ ）。また、性別で分けて相関係数を算出した結果、男性回答者群では個人的受容感と社会的受容感は正の相関が有意であり（ $r = .65, p < .05$ ）、女性回答者群でも個人的受容感と社会的受容感は正の相関が有意であった（ $r = .50, p < .05$ ）。しかし、どの群も同性愛受容感尺度の各下位尺度とIASとの間には有意な相関が見られなかった。

## 考察

性別にかかわらず、IASと同性愛受容感尺度との間に有意な相関関係は見られなかった。このことは、IASが意識的、顕在的態度とは別の側面を測っていること示しており、弁別的妥当性を示す結果と考えられる。また、IASでは全体の平均値が0.01（ $SD = 2.31$ ）

とわずかに正の値を示していたが、ほとんど0に近く、一方で受容感尺度では、個人的受容感は平均が5.77 ( $SD=1.00$ )、社会的受容感は平均が6.25 ( $SD=0.82$ ) とかなりの高得点に偏っていたことから、大学生の男性同性愛への潜在的態度と顕在的態度では肯定の度合いに違いがあり、本音と建前を使い分けていることが考えられた。特に、男性回答者については顕在的態度の指標としては全体的な傾向と同じくかなりの高得点で高い受容感を示していたが、IASは負の値を示しており潜在的にはネガティブな態度を有している者が多くいることが考えられた。女性の回答者は、IAS平均0.18 ( $SD=2.34$ ) と正の値であり、男性よりは顕在的態度と潜在的態度のズレは小さいと考えられる。

## 研究2 方法

**被験者** 大学生10名に、映像視聴前後の唾液採取実験を依頼した。この10名は、研究1で質問紙調査に協力した者に呼びかけ、実験協力の意志を示した者のうち、実験者がIASの高い群（以下、ポジティブ群）、低い群（以下、ネガティブ群）からそれぞれ5名ずつを選出し、依頼のメールを送って参加可能と返信してきた者であった。ただし、高群のうち1名は体調不良のため実験者との都合が合わなくなり参加キャンセルとなった。したがって、最終的にはポジティブ群4名（男性2名、女性1名、その他1名）、ネガティブ群5名（女性5名）の合計9名となった。平均年齢は20.55歳 ( $SD=0.83$ ) であった。IASについてはポジティブ群の平均が1.81 ( $SD=1.05$ )、ネガティブ群の平均が2.85 ( $SD=1.04$ ) であり、群間で有意差が見られた ( $t(7) = 6.66, p < .001$ )。

**実験計画** 潜在的態度 (IASポジティブ群/ネガティブ群) を被験者間変数、唾液採取の時期 (刺激映像視聴前/視聴後) を被験者内変数とする2要因 (2×2) 混合計画。

**実験手続き** 目的と教示: 被験者に参加を呼び掛けるリクルートメールにて「実験1時間前から飲食、喫煙、歯磨き等は控えるように」依頼した (唾液成分への影響を防ぐため)。

**実験当日の手続き:** ①目的 (同性愛者が登場する映像視聴による生理的変化 (唾液中のストレス指標) を測定すること)、実験全体の流れ、所要時間、倫理的配慮 (データから個人が特定される事は無いこと、参

加は任意であり途中でやめることが可能であること等)、謝礼について説明した。②刺激となる映像視聴前の唾液採取。参加者には採取前に紙コップを配布し、手洗い場で口をゆすぐよう指示をし、参加者に口をゆすいだ後に脱脂綿が入った唾液採取専用採取キットを2つ配布した。片方のキットから脱脂綿を取り出し、口に含み、歯で2分間噛んで唾液の採取を行った。その後、被験者自身で唾液を含んだ脱脂綿をキットの中に入れるよう求め、回収した。③刺激映像視聴。同性愛者が登場する映画のワンシーン (20分程度) を視聴させた。④映像視聴後の唾液採取。配布したもう1つのキットから脱脂綿を取り出し、口に含み、歯で2分間噛んで唾液の採取を行うよう被験者に指示をした。ただし、唾液中のCgAがストレス刺激終了後約3分という短時間で大幅な減少が認められるという先行研究 (野村, 2010) の指摘を踏まえ、映像終了前2分の時点から脱脂綿を口に含むよう教示した。採取後、被験者自身で唾液を含んだ脱脂綿をキットの中に入れてものを実験者が回収した。④視聴態度・記憶チェック: 「映画は面白かった」「集中して見ることができた」などの5項目に、「そう思う」～「そう思わない」の4件法で回答を求めた。また、映像に関する記憶について調べるため、「登場した娘の名前は何か」など映画の重要内容に関する質問3項目に回答を求めた。⑤映画に対する感想を自由記述で求めた。⑥謝礼提供: 実験参加への謝礼として、被験者には1000円分のクオカードを提供した。実験終了後、得られた唾液サンプルと質問紙には被験者番号と測定時期 (視聴前・後) をラベリング、直ちに冷凍保存した。全てのサンプルが揃った時点で測定受託業者 (矢内原研究所) に冷凍便にて送付し、サンプル内のCgA量の測定を依頼した。なお、CgA濃度については唾液量の差による濃度への影響を取り除くため蛋白補正值を用いた。

### 刺激として用いた映像について

映像刺激には、映画『his』 (監督: 今泉力哉 配給: ファントム・フィルム, 2020年公開) を選択した。この映画は、男性主人公「迅」と恋人男性「渚」との交流を描いたヒューマンドラマである。2シーンを抜粋して約20分間視聴させた。この映画およびシーンを刺激として選定した理由は以下のとおりであった。

・映像刺激を用いることについては、当事者の手記等の文章による刺激よりも、映像の方が対象のイメー

ジが鮮明に伝わり、その対象への率直な態度やバイアスを検出する刺激として有効であるという先行研究 (Lopez, 1989) に基づく。

- ・洋画より邦画のほうが、日本に生活基盤のある被験者にとってより身近に感じられる刺激として認識されると考えたため。
- ・邦画の中でも、大ヒットしたものは、本実験前に見たことのある者が多くいることが予想される。過去の視聴体験が、実験の剰余変数となることを防ぐため、大ヒットした映画ではないものを選定。
- ・20分程度の限られた時間の中でも、登場人物の男性が同性愛であることや同性間の恋愛感情がはっきり示されているシーンを選択。ただし、倫理的配慮の観点から過剰に性的なシーンは含めなかった。

#### 実験器具

唾液の採取には専用器具 (ザルスタット社製のサリベット (コットン)) を使用した。映像刺激の提示には55インチのモニターおよびDVDプレイヤーを使用した。なお、新型コロナウイルス感染予防の為、使い捨てビニール手袋、アルコール消毒液を用いた。

#### 倫理的配慮

実験協力者には以下の項目について説明し、口頭にて同意を得た後に実験を行った。

- ・実験の目的や手続き、謝礼について。
- ・実験参加は任意であり、参加途中でも参加を取りやめることができること。
- ・出られたデータによって個人が特定されることはないこと。
- ・データの管理方法

本研究計画は、比治山大学・比治山大学短期大学部研究倫理審査委員会にて承認された (承認番号: 2210)。

### 結果

IAS (ポジティブ群/ネガティブ群) と唾液中CgAの相関の検討 実験に参加したIASポジティブ群4名、ネガティブ群5名のCgA濃度の平均値を算出した。ポジティブ群は視聴前の平均が6.07 ( $SD=4.16$ )、視聴後の平均は9.26 ( $SD=4.07$ ) であった。ネガティブ群の視聴前の平均が6.17 ( $SD=6.40$ )、視聴後の平均は17.41 ( $SD=16.58$ ) であった (Figure 1)。群と測定時期を要因とする2要因分散分析の結果、主効果及び交互作用は有意ではなかったが、Figure 1に示したようにネガティブ群では視聴前に比べ視聴後のCgA濃

度が顕著に上昇していた。一方、ポジティブ群では視聴前後のCgA濃度がほとんど変化していなかった。

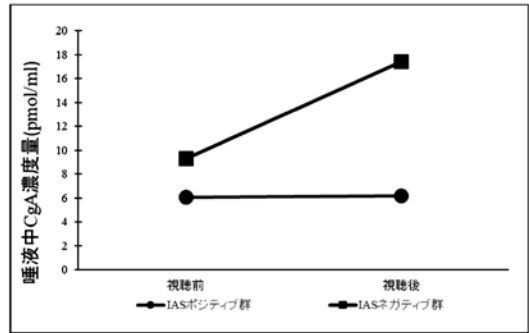


Figure 1. IAS得点群別のクロモグラニンA値 (pmol/ml) の変化

視聴態度項目・記憶チェック項目・自由記述による感想について

視聴態度に関する項目では、5項目の合計得点を算出した。得点が高いほど、集中して刺激映像を視聴できていたなど、視聴態度が良かったことを意味する。IASポジティブ群の平均は17.25 ( $SD=3.11$ )、IASネガティブ群では平均が16.6 ( $SD=3.2$ ) となっており、両群とも視聴態度に問題はみられなかった。また、IASネガティブ群よりもポジティブ群の方が得点が高い結果となった。また、映像に関する記憶項目3項目については、正答だった場合に1点を与え、合計得点を算出した。その結果、IASポジティブ群の平均は1.75 ( $SD=0.43$ )、ネガティブ群は1.20 ( $SD=0.97$ ) となり、こちらもIASネガティブ群よりもポジティブ群の方が得点が高い結果となった。しかし、 $t$ 検定の結果、群間で得点に有意差は見られなかった。視聴態度および記憶得点の記述統計量をTable 1に示した。

Table 1

IAS群別	視聴態度得点および記憶得点			
	視聴態度		記憶得点	
	平均	SD	平均	SD
IASポジティブ群	17.25	3.11	1.75	0.43
IASネガティブ群	16.6	3.20	1.20	0.98

刺激映像に対する感想 (自由記述) の内容をTable 2にまとめた。IASネガティブ群で登場人物であるゲイ男性に対するややネガティブな評価 (「みえっぱりで都合のいいやつ」) が1件みられたが、それ以外に同性愛に関するネガティブな記載はみられなかった。いずれの群においても、同性愛に対する社会の、あるいは自分自身の理解促進に言及した記載がみられた。

Table 2  
IAS群別 刺激映像に対する感想自由記述一覧

【IASポジティブ群】
無回答
無回答
人は失ってから気づくという言葉思い出した。
最初、過去の事を夢で表現されていてストーリーを掴むのに少し時間が掛かった。また、ゲイの人が結婚すると相手に戸惑いを生んだり悩ませてしまつて離婚に繋がるから、なかなか理解されないのかと感じた。私自身、同性愛に対しては理解は示していたし、否定することは無いと思っていたが、身近に感じることはないからやはり驚きはあります。もう少し理解を深めて、いつか驚かず、同性愛の事を受け入れられる日が自分に来ることを願っています。
【IASネガティブ群】
特になし
特になし
渚は見栄っ張りで都合のいいやつだと思った。
ゲイってだけでこんなにしんどいと思いました。身近に居なかったのびっくりしました。
ゲイについては、余りよく知らなかったです。登場人それぞれが、悩み苦しんでいる場面も見られ、ゲイが社会的に理解されると良いと思いました。
友人や知人でゲイやレズの人がいたため、あまり抵抗感をなく見ることが出来た。でも、男同士、女同士の結婚の法令は無いので中々報われない関係だと思う。日本も同性婚を取り入れたらいいのにといつも思う。

## 考察

研究2では、同性愛版FUMIEテストの収束的妥当性について検討するため実験を行い、映像刺激提示前後で、精神的ストレス指標である唾液中クロモグラニン濃度の変化を比較検討した。IASポジティブ群、IASネガティブ群のCgA濃度を映像刺激の視聴前と視聴後で比較した結果、群と測定時期の交互作用は有意ではなかったものの、Figure 1より、視聴後にIASポジティブ群のCgA濃度はほとんど変化が見られなかったが、IASネガティブ群のCgA濃度は、比較的上昇する傾向にあった。IASポジティブ群は映像刺激から精神的ストレスをあまり感じておらず、IASネガティブ群は、男性同性愛に関する映像刺激から精神的ストレスを感じていた可能性があると考えられる。このことから、男性同性愛版FUMIEテストは、男性同性愛者への潜在的態度の測定方法として、一定の収束的妥当性を備えている可能性が示唆された。補助的な指標として得た視聴態度、記憶の指標ともにIASネガティブ群

よりポジティブ群の得点が高い傾向にあったことも、上記のことと矛盾のない結果であると考えられた。

ただし、統計的には群と測定時期の交互作用が有意ではなかった。この点についてはサンプル数の少なさが影響したと考えられるが、男性同性愛版FUMIEテストの収束的妥当性が確認できたとはいえない。

最後に、今後の課題と展望について述べる。本研究は日本における男性同性愛に対する潜在的態度測定について検討し、生理的指標も取り入れてFUMIEテストによる測定の妥当性の確認を試みたという点で意義があると考えられる。しかし、研究2では統計的に有意な交互作用が見いだせなかったことから、サンプルサイズが小さいという問題がある。今後、十分なデータ数を元にさらに検討を重ねる余地がある。検定力分析に基づき必要サンプルサイズを定めるなどのステップが必要と考えられる。

男性同性愛版FUMIEテストは紙筆式の潜在的態度測定となっており、誰でも簡単に、集合法を用いても男性同性愛への潜在的態度を測定できる手法である。ただし、筆者の実施した経験では、集合法による実施は可能であるが、1試行あたりの回答時間の管理など手続きを徹底して行う必要があると考えられた。実施にあたっては研究者の目が十分にいきわたるサイズの対象者数で行う必要があり、この点で注意が必要である。今後、同性愛者への潜在的態度の観点から実験や調査を行い更なる知見を集めていくことで、同性愛者に対するアンコンシャス・バイアスを低減していくための効果的取り組みの促進に寄与すると考えられる。学校や大学、職場などで教育的介入を行い、顕在的態度と潜在的態度の双方からその効果や課題を検証し、結果に応じてさらなる取り組みを検討、推進していくことが、同性愛の人々の精神的健康に寄与する介入等の一助になればと思う。

## 引用文献

- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E. L., & Banaji, M. R. (2009). Understanding and using the Implicit Association Test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 1724-1735.

- Psychology*, 97, 17-41.
- 畑 潮・小杉 幹子・小野寺 敦子(2011). 唾液中クロモグラニンAを指標とした心理的ストレス反応とエゴ・レジリエンスとの関連 目白大学心理学研究, 7, 67-80.
- 日高 庸晴(2016). LGBT当事者の意識調査～いじめ問題と職場環境等の課題～(2022” [https://www.health-issue.jp/reach\\_online2016\\_report.pdf](https://www.health-issue.jp/reach_online2016_report.pdf) (2022年10月1日)
- 葛西 真紀子(2011). 同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版(LGB-CSIJ)作成の試み 鳴門教育大学研究紀要, 26, 76-87.
- 木村 美可・河野 麻衣・中明 初予・鈴木 めぐみ・神川 康子・矢田 幸博(2011). 生理用ナプキンの装着感が心身に与える影響(第2報)日本生理人類学会誌, 16 (1), 1-7.
- 古長 治基(2016). 性別および同性愛者タイプと同性愛者に対する受容感の関連 九州大学理学研究, 17, 45-51.
- Lopez, S. R. (1989). Patient variables biases in clinical judgment: Conceptual overview and methodological considerations. *Psychological Bulletin*, 106, 184-203.
- 松井 美由紀・乗松 貞子(2012). 緑色の照明が人間に及ぼす生理的・心理的影響 健康心理学研究, 25 (2), 1-9.
- 三木 圭一(2008). 唾液中クロモグラニンA 濃度の生体負担指標としての検証—長時間の被験者実験での応用— 労働安全衛生研究, 1, 59-62.
- Mori Kazuo, Uchida Akitoshi, Imada Rika, (2008). A Paper-format Group Performance Test for Measuring the Implicit Association of Target Concepts. Unpublished manuscript submitted for publication.
- 中野 大進・脇岡 奏都(2021). 大学生が抱く同性愛者に対する本音と建前 比治山大学現代文化学部卒業論文(未公開)
- Pew Research Center (2013). The global divide on homosexuality <http://www.pewglobal.org/2013/06/04/the-global-divide-on-homosexuality/> (2020年5月22日)
- Rainer Banse, Jan Seise, & Nikola Zebes, (2001), Implicit Attitudestowards Homosexuality: Reliability, Validity, and Controllability of the IAT. *Zeitschrift fur Experimentelle Psychologie*, 48, 2, 145-160.
- 下田 俊介・大久保 暢俊・小林 麻衣・佐藤 重隆・北村 英哉(2014). 日本語版IPNAT作成の試み 心理学研究, 85, 294-303.
- 品川 由佳(2006). 男性同性愛者に対するカウンセラーのクリニカル・バイアスとジェンダー関連要因との関係—実験法によるカウンセラー反応の検討— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域), 55, 297-306.
- 潮村 公弘・村上 史郎・小林 知博(2003). 潜在的社会的認知研究の進展IAT (Implicit Association Test)への招待 信州大学人文学部人間科学論集人間情報学科編, 37, 65-84.
- 田中 美月・伊藤 拓・葛西 真紀子(2019). 同性愛者(LG)への態度と被異質不安傾向・異質拒否傾向との関連 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 33, 120-129.
- 和田 実(2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究, 81, 356-363.
- 吉中 崇・風間 考・石田 仁・河口 和也・釜野 さおり(2015). セクシュアル・マイノリティに対する意識の属性による比較：全国調査と大学生対象の先行研究を中心に 新情報, 103, 20, 1-13.